



祝！大谷翔平 4 度目 MVP_満票達成



ゴッホ展_家族がつないだ画家の夢

昨日から 26 日 (水) の期間で、聴覚障害者による“東京デフリンピック 2025”が初めて日本を会場に始まりました。81 か国・地域 3081 人のろう者アスリートが 100 年の時を経てここ東京に集まっています。パラリンピックは 1960 年からのスタートですが、デフリンピックの歴史は古く 1924 年にフランスで開かれたのが始まりだそうです。なお、パラリンピックには聞こえない選手の競技種目はありません。個人的にはなぜ？と思いますが、デフリンピックの競技ルールは聞こえない選手のための視覚的保障がなされた競技環境が整っているのが特徴なんだそうです。デフリンピックは聴覚障害があり、かつ特定の大会で上位の成績をおさめることが条件となっていました。また、パラリンピックの選手たちは、手足の切断や麻痺、神経障害、失明 etc. それぞれの特殊性や障害を抱えながら競技に臨みます。世界人口の 5% 以上—4 億 3,000 万人—が“聴覚障害”を抱えているとのことで、これらの障害者の中には、国際大会に参加できるスポーツ選手や女性も数多く含まれていますが、聴覚障害者がパラリンピックに参加したことは一度もないそうです。聴覚障害を現在のパラリンピック競技に組み込むことは難しく、聴覚障害は、手足の欠損や失明よりも、スポーツを実践する上で障害になりやすいと考えられているそうです。この違いについて国際ろう者スポーツ委員会は、“むしろ、私たちは自分たちを文化的・言語的マイノリティの一員とみなしています。ろう者のアスリートは、コミュニケーションの障害を除けば、身体的に大きな制限を受けることなく競技に参加することができ、チームスポーツや一部の個人競技では、難聴が制約となることがありますが、デフゲームズではこのような制約はありません。競技とそのルールは健常者と同じで、特別な競技はなく、聴覚信号を見えるようにすることが適応

である”とのこと。“手話”という言葉を使って、健常者と同じレベルで競技ができる、そこがパラ競技との決定的な違いなのではないでしょうか。歴的な競技団体間の生い立ちの違いもあるのかなと感じています。

同じく昨日、大谷翔平投手は全米野球記者協会の投票で選出されるナ・リーグの最優秀選手賞(MVP)を満票で受賞しました。3年連続は2001～2004年のバリー・ボンズ以来2人目で、4度はボンズの7度に次ぐ歴代単独2位。米データ企業が指摘した衝撃の事実に、ファンから驚きの声が上がっている。MLB史上、MVP賞を満票で複数シーズン獲得した選手は大谷以外にいません。今回4度も達成した史上初の選手となりました。10月17日に行われたナ・リーグ優勝決定シリーズ第4戦で披露した1試合3本塁打&10奪三振の投打での圧巻パフォーマンスが“年間レジェンド・モメント賞”も受賞しており、その後MLBアワードでハンク・アーロン賞、エドガー・マルティネス賞—最優秀DH賞—、オールMLBなど4冠、タイトル総ナメみたいな感じでした。大谷選手の打者としての記録の上にはかのバリー・ボンズがいますが、彼は筋肉増強のステロイド系薬物使用疑惑で晩節を濁しており、今後の大谷選手との記録の比較ではこの点が問題になってくる可能性もあります。大谷選手と同じ時代に大記録を作った選手が、すべて賞を大谷選手に独占されるという、少し気の毒な感もありますが、投げて、撃って、走るという選手が大谷選手の記録を超えなければ、もうしばらくは大谷の時代が続くだろうと思います。大谷が衰えた後に出てくる選手がインパクトに欠けてしまうという“MLB冬の時代”が訪れることも想定されます。エンゼルス時代のバリーにはPSがなかったので、世界一をめざすにはWBCしかありませんでしたが、来年ドジャースが3連破をめざすとなれば、球団側も本人もWBCで体を消耗する意味がなくなるので、山本、佐々木含め、投球するということはないかもしれません。そうなればWBCも魅力半減ですね。

NHK党の立花党首が名誉棄損罪で兵庫県警に逮捕されました。斎藤元彦兵庫県知事再戦に向けて、本人が当選するつもりもない“2馬力選挙”なるもの企てた上で百条委員会の県議をデマや誹謗中傷で自殺に追い込んだ手口は卑劣そのもので当然です。それ以前からN党を立ち上げた政治家としての資質すら僕はずっと疑っていました。彼の登場で国政が非常に下劣なものに変わってしまったと個人的に感じています。東京新聞“本音のコラム”斎藤美奈子さんの論評です。

仲介者の責任 11月12日付

斎藤 美奈子 — 文芸評論家 —

9日、N党の立花孝志党首が故竹内英明元兵庫県議に対する名誉棄損容疑で逮捕された。

もとをただせばこの件は昨年 11 月の兵庫県知事選に斎藤元彦知事を応援すると称して立花氏が立候補、「2 馬力選挙」を展開したのが発端である。デマや誹謗中傷を含む未確定の情報を動画などで発信し、それが拡散されて選挙結果を左右する。立花方式とも呼ぶべきこの方法がその後の選挙戦や政治に及ぼした影響は計り知れない。

思い出されるのは立花氏の怪しげな情報を鵜呑みにし、彼の主張や方法論にお墨付きを与えた人たちのことである。

「竹内議員は百条委員会で数々の疑惑が指摘されていたことも事実」などと X に投稿した東国原英夫氏(後に削除)。自身が運営する動画サイトで、立花氏の主張をたっぷり紹介した中田敦彦氏(現在は登録メンバーにのみ公開)。

国民民主の玉木雄一郎代表は立花氏逮捕を受けて「長く人権侵害が続くような事案については何らかの規制が必要だ」と見解を示したが、玉木氏主宰の動画サイトには立花氏を招き、嬉々として選挙戦略を聞く過去の動画(2019 年)が残っている。参院で N 党と会派を組んだ高市首相も当然批判は免れまい。

立花氏の逮捕を単純に歓迎するのも問題だが、わが身を省みる契機にはなる。仲介者の責任も重いのだ。

昨日の新聞で罪状は懲役 2 年程度ではないかのことです。前科者になるので、出所後もしばらくは公民権停止の期間があるかと思います。できればその間に政治生命が断たれることを個人的には願っています。あの参政党の躍進もなんとかならんもんかなあ〜。N 党も参政党もウラでは高市さんと繋がっていると確信していますが、彼の逮捕とともに手のひらを返したような高市さんの知らんぷり、さすがタヌキかキツネだよなと、あのひきつった笑顔を思い浮べている昨今です。

その高市首相、今日中日を迎えた大相撲九州場所で“内閣総理大臣杯”授与のために土俵に上られるのが話題になっています。土俵は伝統的に“女人禁制”とのこと、彼女及び今後の女性首相のために、相撲協会はルールを改変するのでしょうか。今回はあと 1 週間しかないので、おそらくはムリだと思います。首相補佐官とか幹事長が代理で授与ということになるのでしょうか。お気の毒に…。

また、その高市首相、先日 ASEAN の会合で習近平氏とお互い作り笑いで握手をして、なごやかに？会談されてたような雰囲気でしたが、台湾有事をめぐり、今度は目を吊り上げてニラメッコを始めました。とっても険悪なムード、一色触発てな感じです。東京新聞“本音のコラム”鎌田慧さんの論評です。

「存立危機」内閣の行方 11月11日付

鎌田 慧 — ルポライター —

トランプ米大統領への厳しい批判は米国内でも広がっている。彼にノーベル平和賞を与えたい、と念願する高市早苗首相は平和主義者のはずだが、台湾有事を日本有事と捉える安倍晋

三、麻生太郎元首相の信奉者でもある。しかし、2人の発言は首相退任後だ。後任の岸田文雄氏も首相時代には「いかなる事態が存立危機事態かは…一概に述べるのは困難」と慎重だった。

ところが高市首相、7日の衆院予算委員会で、中国が台湾を完全に支配下に置くために「戦艦を使い武力の行使を伴うものであれば、どう考えても存立危機事態になりうるケースだ」と強弁した。同盟国・米軍が攻撃されると「集団的自衛権」を行使できる、日本参戦という事態である。

しかし、憲法9条は「交戦権」を認めず、13条の「生命、自由、幸福追求権」が厳然として存在している。専守防衛までは認められているとはいえ、日本が直接攻撃されていないのに自衛隊が武力行使するなど認められない。中国に対する挑戦的な発言である。

参戦すれば台湾に近い与那国島や西表島、石垣島、宮古島が危うく、沖縄本島の米軍基地への攻撃も想定される。高市首相は10日になって、「従来の(内閣の)立場を変えるものではない」とした。トランプ氏に迎合、沖縄を見捨てる高市内閣こそ、存立危機事態であろう。

高市さんの“ツルの一声”で中国政府は怒り心頭、お互いの国民の出入国に規制をかけてきました。物価が安くて治安のよい日本が、中国人観光客には魅力的なようですが、日本には行くな、日本人は来るといふ国民感情を煽っているようです。高市さんの言っていることは“専守防衛”からは大きく逸脱しているので、早めに振り上げたこぶしを下ろして、折衷案を提示した方が世界平和のため、トランプさんのノーベル平和賞の後押しになるのでは思うのですが…。

先週11日、上野公園にある都美術館で開催されている“ゴッホ展”に足を運んできました。閉幕まであと1ヵ月、半月前あたりから完全予約制になるので、その前に観てきました。ゴッホの作品展は過去に3回ほど観ているので、絵そのものにはそれほど興味はなかったのですが、今回は彼が生前1枚しか売れなかったものを弟のテオ、そしてその妻ヨーと一人息子のフィンセント・ウィレム・ファン・ゴッホが遺作を大切に管理し、オランダのアムステルダムに美術館を建設するまでのストーリーを丁寧に企画していました。ゴッホの死後30年後に美術館を建設するための財団を設立するための資金調達に売却した作品も観ることができ、新たな感動を覚えました。ゴッホと弟テオやヨーとの関係は、原田マハ作品のゴッホの伝記“たゆたえども沈まず”と“ゴッホのあしあと”などで背景はある程度知っていたので、今回の展示はとても入りやすく心地よい空間でした。上野公園では来年2月まで“大絶滅展—生命史のビッグファイブ”も開催されていて、これもとても興味深く、近々行ってみたいと考えています。

俳優の仲代達也さん92歳の訃報が届きました。とても好きな役者さんのひとりだったのでとても残念です。今朝、NHKで彼のドキュメンタリーを見ましたが、やはり生きざまに鬼気迫るものがあり、思わず涙がこみ上げてきました。これといって特に才能もない僕には、彼のような表現者には成れるわけもないのですが、残された人生“世のため、人のため”になるようなことを模索して生きていきたいものだと思ふようになりました。